い、その者を罰しなかったと云うことです。　志摩守のこの深慮が今日の立派な松浦として作り上げられたものであります。

（雜　話）

松浦党のこと

渡辺綱（人皇五十二代嵯峨天皇より五代目の裔）が源頼光に從ひ九州に来た時、松浦郡箭弁の舘に住み、その孫久が松浦に住してから、その子孫が増加し各地に拡がつて行きました。そして一族が次第に根を張り、朝党を組み勢を張りましたが、彼等は屢々朝鮮、当時の高麗方面まで出掛け、通商だけではなく、海賊も伴いたので、朝鮮から非常に恐れられていたのであります。　そして一族は、松浦、波多、石志、神田、佐志、相知、有田、大河野、鶴田、峰、山代、八並、鷺島、鴨打、木島、黒川、清水、吉永、志佐、吉野、宇久島、御厨、小左々、伊万里、津吉、値賀、名古屋、と云うように、松浦四十九党を作るに至りました。　今日の地名と合せ見ると、その根據した地位がわかります。　岸嶽城に居た、波多三河守もその子孫になる訳で、この松浦党の頭領でありました。　元軍が大挙して来た文永十一年、弘安四年には、この松浦党が大いに伴いて大役を勤めました。　松浦党の諸氏は足利時代の末期には、お互に団結を欠き相爭い逐次没落しましたが、平戸の松浦氏のみは、豊臣、徳川に任え、今日に及んでおります。

秀吉と秀の前

秀吉は名護屋陣中で徒然のあまり、善吉利新左エ門に命じ山三郎夫婦の物まね上手を呼び、諸候初め郎党小者にまでこの物まね芸を芝生の上で見せました。

太閤は兼ねて美貌の噂さ高い、波多三河守の妻女秀の前を呼んで、その容色を見たいと思つていたので、丁度よい機会と、この見物に招き招きました。　秀の前は夫出陣留守中だから、御免蒙り度いと辞退しましたが、再参の呼出しで、仕方なく名護屋に行きました。山三郎の芸済み、酒宴も終つたので帰ろうとしますと、「尋ねる儀がある」とのことで城中で止められ、翌朝更にお尋ねもないので、辞して帰ろうとすると、「三河守は陰謀がある由、その申開きが出来ぬ内は帰城ならぬ」と難題を持ちかけられ、秀の前は驚き窮し、御前を退出して自害しようとしましたが、自害しては、却つて夫の身が禁ぜられるので、気を取り直し、御側付の生駒主殿介を通じて、更に帰城を願い出て、太閤の前に呼び出されたのであります。　その時懐中にしていた懐剣を不覚にも落しました。　秀吉は、「女が懐剣を持つは　その時と所による。疑わしい。　何れ沙汰する。」と大いに怒つて、「直ぐ帰城し、三河守帰國迄謹慎せよ」と命ぜられました。　これが、波多家没落の原因となり、三河守は朝鮮で大いに伴いたにもかゝわらず、凱旋してみると、常州筑波山に配流仰せつけられ、領地没収となり、その後至受けて城主となつたのが、寺沢志摩守広高で、即ち　唐津城の初代城主であります。　秀の前は龍造寺隆信の息女であつたので、佐賀に帰り遂に三十二才を最后として自害して果てました。